

# 古墳文化が花開くまで①

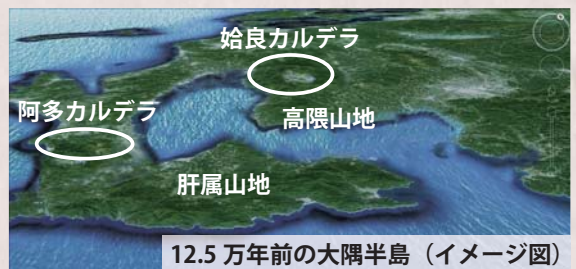
今年10月31日・11月1日、第30回国民文化祭において大崎町では「横瀬古墳とヤマト王権のつながり」が開催される。それにむけて、約1550年前に大崎の地で古墳文化が花開くまでの背景を探っていきたい。

子どもの頃に訪れた人も多いと思われる草野丘。新たに整備されている展望所からは、志布志湾と海岸線へ広がる大崎南部の台地を一望できる。大崎町は南北に細長いひょうたん形をしていて、北部は標高150m〜200mの丘陵地帯・台地であり、南部の台地は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形になっている。その台地を菱田川・田原川・持留川の3つの河川が南流し志布志湾に注いでいる。草野丘から西持留の四季の森にかけての一角が丘陵地帯となっていて、まるで大崎町の北部と南部を分断するかのよう存在している。

火砕流」と呼ばれる。始良カルデラの噴火は、桜島大正噴火の数百倍も大きいといわれるほどで、南九州の動植物が全滅したと考えられている。

丘陵地帯には、古第三紀の(約6500万年前〜約2400万年前)に形成された「日南層群」と呼ばれる地層がみられる。草野丘や四季の森は、本来もっと高く連なる山々であったはずであるが、入戸火砕流の堆積によってほとんどが埋まってしまい、山の頂上部分だけが残った状態である。私たちの地域で見ることのできる地層の中で最も古いことになる。田原川と持留川の水源をたどっていくと、この丘陵地帯に行き着く。

海岸近くの低地では、河川から流れ込む土砂が堆積した「砂州」と海風によって運ばれた砂が堆積した小高い「砂丘」が形成されている。砂州・砂丘によって河川の流路が妨げられた一角が湿地となり、植物遺体を多く含む泥質の土(泥炭層)もみられる。古いとされる横瀬砂州は、約5500年〜約4500年前に形成されたと考えられている。さて志布志湾に少し着目してみると、海が広がったり陸地になったり



の過程を経ている。約11万年前に大噴火した阿多カルデラの火砕流や入戸火砕流によって埋めつくされる以前の約13万〜約12万5000年前に遡ると、海面の上昇もあつて志布志湾と鹿兒島湾がつながっていたと考えられている。大崎の大部分が海になっていったことになる。またシラス台地が形成された約29000年前は氷河期にあたり、海面が最も低かった時期である。海拔は現在より120mほど低かったといわれる。そのため都井岬沖から内之浦沖にかけて海岸線となり陸地が広がっていた。志布志湾は存在しなかったのである。さらに時代が下って、縄文海進のピーク時にあたる約6000年前は、下永吉から菱田にかけて海岸

線となっていた。海の浸食を受けたシラス台地の先端部が「海食崖」として残っていて、当時の様子を想像することができる。

海・河川・台地・丘陵といったそれぞれが壮大な時間の流れの中で影響を与えあいながら、大崎の自然豊かな環境を織り成している。その中で先人たちは自然と共存しながらどのように風土を育んでいったのだろうか。次回から先人たちの足跡をたどっていききたい。(続く)

## 【参考文献】

- ・大木公彦(2000)『鹿兒島湾の謎をおつて』春苑堂書店。
- ・鹿兒島大学総合研究博物館(2008)『News Letter No. 20』
- ・鹿兒島大学総合研究博物館。
- ・永迫俊郎ほか(1998)「肝属平野の形成史 テフラとAMS14C年代による」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』名古屋大学年代測定試料研究センター。

## 受講生募集!

生涯学習講座

「横瀬古墳  
ボランティア養成講座」

国民文化祭にボランティアとして参加してみませんか?

★全9回

6/10(水) 6/27(土)  
7/ 8(水) 7/22(土)  
8/12(水) 8/26(土)  
9/ 9(水) 9/30(土)  
10/10(土)

★時間: 19時〜21時  
(※2回目・9回目は9時〜12時)

★場所: 中央公民館 ほか

★申込み・問い合わせは社会教育課まで  
TEL 099-476-0548